

第4回

羊蹄山地域サポーター育成検定試験

【初級問題】

平成22年7月17日

注 意

1. 開始の合図があるまでは、答案用紙を開かないでください。
2. 開始後40分が過ぎる前に会場を退出することはできません。

次の1から11までのテーマに関する文章をよんで、問【1】～問【50】の設問に該当する答をひとつだけ選んで○をつけてください。設問と回答は別紙です。

1：「羊蹄山」山名の起源

「羊蹄山（ようていざん）」は、「後方羊蹄山【1】」と記されることもあります。この「後方羊蹄」の名を始めて記した史書は、『【2】』です。この中に、659（斉明5）年、【3】が百八十艘の軍船を率いて北征した際、二人の蝦夷から「後方羊蹄をもって政所とすべし」と進言があり、そこに群領を置いて帰った、と記されています。「後方羊蹄」の地名は、この後、【4】など多くの史家や探検家たちの想像力をかきたててきました。

2：「羊蹄山」山名の変遷

「後方羊蹄山」と【5】は、ともに尻別川流域に並ぶ山ですが、和人の記録の中では、この両者はしばしば取り違えられたりしています。“尻別川の地こそが「後方羊蹄」である”と記したのは「蝦夷志」ですが、「後方羊蹄」と「尻別」の読みが近いこともあって、その後さまざまな混乱が続きます。しかしアイヌの人たちは、前者をマチネシリ（女である山）、後者をピンネシリ（男である山）と区別して呼んでいました。また、前者は、別名【6】とも言われていました。明治30年代から北海道への入植者が急増するに従い、「後方羊蹄山」の読み方が難しいなどの理由から、その山容にちなんで「蝦夷富士」と称されることが増え、地元自治体【7】からの要望もあって、昭和40年代の地形図からは、【8】と記されるようになったのです。

3：羊蹄山観光開発の始まり

羊蹄山麓の観光史にとって、【9】は忘れることのできない年でした。この年、大量輸送機関となる【10】が小樽から函館まで延びたことで、それぞれ地元の駅名をどうするか大きな関心事となりました。倶知安町では、【11】が大きく蛇行する大曲地区あたりに作られた駅を【12】と名づけ、旅行者の関心をこの地にひきつけようという動きが生まれます。この動きの中心にあったのが、「蝦夷富士登山会」です。彼らは、旅行者の関心を羊蹄山に誘うため、【12】から羊蹄山頂に至る登山路を開削します。この倶知安コースは、羊蹄山の【13】番目の登山路です。また後方羊蹄神社を開山し、【14】伝説を大いに活用した観光開発を推進しました。仰ぎ見る山であった羊蹄山への登山をアピールした、観光開発の始まりです。

4：羊蹄山は二重構造の火山

羊蹄山は単独峰のコニーデ型火山ですが、同じコニーデ型の富士山同様、内部は複雑な構造となっています。羊蹄山ができたのはおよそ2万6千年前からですので、新しい火山と言えます。羊蹄山の生成は【15】の形成から始まりますが、これはおよそ1,000メートル級の火山です。これを覆い隠すように「本体火山」が形成されますが、その噴火の過程で西側に大量の溶岩が噴出し、西側に大きく膨らんだ今の形ができます。【16】側から見るとそのふくらみ具合が顕著にわかります。山肌を見ると、谷筋が急に曲がったり分岐したりしているところがありますが、これは【17】と言われます。そこで基盤岩が異なっているために起きる現象ですが、羊蹄山の場合、この【17】を横につなげると、山が3つに区分されます。このことから、羊蹄山の形成史を知ることができるのです。羊蹄山は、今日5つの自治体【18】の行政界によって構成されており、平成2年に確定された標高は、【19】メートルです。

5：レルヒ中佐のスキー登山

明治45年、【20】軍人テオドール・フォン・レルヒが、旭川の第7師団に着任し、早速羊蹄山へのスキー登山を敢行します。スキー登山に先立って、レルヒは【21】の小高い山で地域住民に1本杖スキー術を披露していますが、これがこの地域でのスキー普及に大きな影響を与えました。羊蹄山へのスキー登山は、第7師団の若手将校を伴い行われ、【22】の同行取材と報道によって脚光を浴びました。今日ではスキーはニセコ山系で隆盛を極めていますが、その源流はレルヒ中佐の羊蹄山スキー登山だったのです。第7師団の将校たちはスキー術を北大（当時は農科大学）の学生スキー部に伝授し、北大学生スキー部はその後、ニセコ山系におけるスキーの歴史に大きな足跡を残します。レルヒ中佐の像は【21】にあります。

6：「ニセコ」の名称にまつわる歴史の謎

全国的に有名になった「ニセコ」はニセコアンヌプリの略称ですが、ニセコアンヌプリは山容のイメージとは異なる【23】という意味を持っています。この地名も不思議ですが、明治20年代までの地図には、隣の山【24】は載っていてもニセコ山系の主峰ニセコアンヌプリは載っていないのです。この謎は、「ニセコ」がかつてどのような地域であったのかを物語っています。つまり、【24】やニセコアンヌプリなどは、いずれも幕末から硫黄の採掘現場でしたので、総称して「硫黄山」と呼称され、最も標高が高く景観としても目立ったはずのニセコアンヌプリには、明治20年代まで「硫黄山」以外の固有の名称が付かなかったのです。硫黄の採掘については明治政府も企業も大きな関心を寄せ、【25】も調査を行っています。経営体が交代しながら硫黄の採掘は【26】まで続けられ、地域の歴史に大きな影響を与えました。

7：温泉とスキーが創った「ニセコ」ブランド

ニセコ・羊蹄山麓の温泉史は、明治30年に開業した【27】に始まります。【27】の場所にその後、【28】が開設されますので、ニセコ山系における温泉とスキーの結びつきを象徴する幕開けと言えます。鉄道がこの地に延伸され蝦夷富士登山会が結成された同じ年には、【29】が開業します。今の昆布温泉郷のなかの温泉の一つです。鉄道の乗客が温泉に関心を持たないはずはなく、この頃からさまざまな温泉が開業します。【29】には北大学生スキー部が毎年合宿し、同じ昆布温泉郷の宮川温泉には小樽高商スキー部が合宿し、温泉とスキーの結びつきを深めます。昭和3年、スイスの【30】で冬季オリンピックが開かれ、日本からもはじめて選手が派遣されました。連日の報道により、日本国内でも【30】は耳馴染みになります。この冬季オリンピック終了直後、秩父宮さまが【29】の不老閣に宿泊してスキー登山に臨みますが、悪天候のため遭難騒ぎまで起きます。この一部始終が全国に報道されたことから、ニセコ山系の雪質が【30】にも劣らないパウダースノーであることが全国に知られ、「ニセコ」の名が一気に全国区となったのでした。その後、【29】は大きな歴史的役割を終えるかのように、その華々しい歴史を閉じます。

8：羊蹄山麓の湧水

羊蹄山の裾野には、湧水地が15箇所以上あります。日本の名水100選にも選ばれた【31】の湧水はその代表例で、観光地としても有名です。ほとんどの湧水は、標高【32】メートル前後にある、溶岩と粘土層の境目から湧出しています。全体で日に30万トンも湧出していますが、京極町から真狩村にかけての南東半分6箇所ですべての70%を超えています。特に、【31】の湧水は、公式ホームページによると日に8万トンも湧出しているため、計算上は1秒に1トン近い湧出量になります。このような湧出量の偏りは、羊蹄山の内部が東西に対称でないことに原因があります。火山山麓の湧水が美味しいのは、雨水などが地中を流下する際きれいにろ過され、カルシウムやマグネシウムなどのミネラルが適度に溶け込み、水温も【33】とほぼ一定するからです。この水質についても、羊蹄山の南東部と北西部では違いが見られます。水量が多い南東部では北西部より地中の流下速度が速く、結果的にミネラルの成分がやや薄くなり、湧水はそれぞれ個性的な味わいとなっています。湧出量の多い羊蹄山麓の町村では、湧水を用いて【34】など商品を開発し販売しています。

9：松浦武四郎による尻別川の踏査

「北海道」の名付け親松浦武四郎が、江戸幕府の命により尻別川をはじめて踏査したのは、安政4年です。この年の春、彼は尻別川の河口から川を遡りますが、激流に阻まれ目名地区（蘭越町）のあたりで遡上を断念し、引き返します。同年の夏、三度目の試みで、虻田から今の留寿都村を通りぬけて、【35】の相川地区あたりで尻別川に出ます。そこから尻別川の上流に向けて遡り、鈴川地区のあたりで引き返し、今度は川を下って、途中「ブイラ」と言われた激流ポイントを何箇所も超えて、やっと河口にたどり着きます。翌年、武四郎は再び虻田から【35】の相川地区あたりに向います。今度は尻別川の支流【36】を遡り、中山峠を越えて石狩に抜けます。このときのルートはその後、明治3年から4年にかけて開削された【37】の基となり、今日の国道230号に結実します。この2回の調査結果は公式の報告書として幕府に提出されましたが、公開が禁止されたことから、武四郎はその内容を一般に広めるため「後方羊蹄日誌」を著します。この中で、武四郎は【38】に登ったと記していますが、最近の研究でこれはフィクションであることがほぼ確実となっています。【38】の素晴らしさを多くの人に伝えたいという、武四郎の想いが表れていると言えるでしょう。

10：尻別川流域の生活圏と川利用のルール

尻別川は流路延長129キロメートルで、流域自治体は後志支庁管内の7町村をあわせて全【39】市町村、源流域の自治体は【40】です。多くの支流がありますが、羊蹄山の南側を巻き込むように流れるのは【41】です。武四郎が描いた古地図には、この【41】も羊蹄山の北側を流れているように描かれています。流域の主な産業は農業ですが、農業用水や発電用のダムが尻別川には【42】箇所あります。その全てに魚道が設置されるようになったのはこの10年間の出来事ですが、NPOを含む住民の要請とこれに応えたダム所有企業による流域連携の成果と言えます。寒別発電所ができてからは、その上流域でイトウの姿が消えたと言われていたのです。河口付近ではヤツメウナギなどの内水面漁業も盛んで、近年は【43】などの新しいアクティビティも大勢の観光客を集め、冬のスキーに勝るとも劣らない夏の観光産業として隆盛を極めるようになりました。このように、川の多様な利用形態が混在するようになったことから、それぞれの利害や利用形態の調整を図るため、NPOなど住民が中心になって、2000年にそれぞれの利害を調整して川利用のルールを作りました。また、川利用のルールに公的な拘束力をもたせるため、流域【44】町村が広域で「尻別川統一条例」を制定し、尻別川の恵みを後世に伝えるべく努力しています。

11：農と食

羊蹄山麓の農業は、畑作と水田が大きな特徴となっています。地域の名前が ブランド化した【45】の米、日本一の生産量を誇る【46】のユリ根、かつては生産量が日本一だった喜茂別町の【47】などが代表的な農作物です。しかし、この地域のもっとも大きな特徴となるブランド農作物はジャガイモです。明治初期にさまざまな品種のジャガイモが導入され品種改良も行われ、大正末期には男爵がこの地域の代表的な品種に育ちました。昭和10年代には、留寿都村で【48】が誕生、羊蹄山麓はジャガイモの一大生産地となりました。収益性の高いジャガイモは連作になりがちで、昭和40年代には日本で始めて【49】による被害が発生。深刻な事態となりましたが、輪作体系の徹底と抵抗品種の開発により、【49】は今日ほぼ克服されています。抵抗品種の中でも留寿都村の農家はその普及に努力した【50】は、調理のしやすさや食味の点でも消費者に歓迎されています。このような抵抗品種や輪作の組み合わせによって、羊蹄山麓の各町村はそれぞれが個性的で多様なジャガイモ産地を形成しています。

設問は以上です